

平成 30 年度 第 1 回 岩手県生涯学習審議会・岩手県社会教育委員会議 議事録

1 日 時

平成 30 年 7 月 19 日 (木) 13 : 30 ~

2 会 場

盛岡地区合同庁舎 8 階大会議室

3 出席者 (敬称略)

(1) 委員

伊藤由紀子、大橋清司、菅野祐太、瀬川愛子、高橋香澄、高橋聡、
田口昭隆、恒川かおり、畠山雅之、馬場智子、古里吉久、細川恵子

(2) 事務局

教育長 高橋嘉行、教育次長 今野秀一、教育次長 岩井昭、
生涯学習文化財課総括課長 佐藤公一、学校調整課総括課長 佐藤有、
学校教育課総括課長 小久保智史、保健体育課総括課長 荒木田光孝、
生涯学習推進センター所長 藤原安生、県立図書館長 朴澤ゆかり、
県立博物館副館長 千葉徳郎、県立美術館副館長 小平浩、
スポーツ振興事業団事務局長 高橋徹、生涯学習担当課長 千田貴浩、
文化財課長 鎌田勉、文化財専門員 半澤武彦、
文化財専門員 花坂政博、文化財専門員 大道篤史、
主任主査 川村信、主任社会教育主事 千葉憲一、
主任指導主事 吉田武雄、主任社会教育主事 菊池一洋、
主任社会教育主事 澤柳健一、社会教育主事 岩淵忠徳、
社会教育主事 松川仁紀

4 会議次第

(1) 開会

(2) 挨拶

(3) 委員紹介

(4) 事務局紹介

(5) 議長選出

事務局一任により、大橋清司委員を議長に選出

(6) 協議

(7) 閉会

5 協議内容

(1) 平成 30 年度主要施策について

①「生涯学習文化財課、学校調整課、学校教育課、保健体育課より説明 (内容省略)」

—質疑—

【恒川かおり委員】

2 ページにあるアクセス数の目標値 27,265 に対して、実績値が 63,524 と非常に高いが、何か工夫されたのか。また、今年度の目標値 28,450 は低いのではないか。

【佐藤総括課長】

アクセス数の実績は、平成 26 年から右肩上がりになっている。システムの運用は推進センターで行っているが、こまめに情報の更新を行っている。また、様々なバナーをトップページに配して、行政担当者や生涯学習ボランティア、家庭教育に取り組んでいる方など多様な方々を対象に、あらゆる情報を提供しよう心がけている。そのあたりが成果につながっているのではないか。アクセスの中身についても推進センターでまとめ、分析しながら改善に努めている。目標値については、次のアクションプラン計画の際、現状を踏まえながら適切な目標値設定に取り組んで参りたい。

【高橋香澄委員】

コミュニティ・スクール（以下、CS）について。昔はあった子どもと地域との接点が希薄になっている中で、2020 年度までに県としてどのように進めていくのか。

【佐藤総括課長】

本県が進める CS について、57 ページにポンチ絵を示している。2020 年を目途としているのは、現在は法律上努力義務となっている CS による学校運営が、5 年後には義務化の方向で進んでいくという信頼できる情報からである。今こそ、岩手の地域と学校の連携・協働を今後どのように進めていくか、考えていかなければならない。その一つの手立てとして、CS があるものと考えている。一方、半世紀以上にわたり本県で進められてきた教育振興運動は、やはり学校と家庭の連携・協働の基盤であるという考え方を確認している。地域と学校の関係性が薄らいできたというのは、各地で聞かれる。そのためにも、ポンチ絵のとおり地域では「学校を核とした地域づくり」、学校では「地域とともにある学校づくり」を進め、地域人材を学校の教育活動にもっと生かし、関わりを深めていくことができれば、地域の方々にとっても学校の存在、学校の理解が深まるのではないか。岩手の CS を進めていくことこそが、地域にとって学校をより身近に感じてもらう手立てになるのではないか。

【高橋聡委員】

保健体育課、部活動に関して。世の中の流れとしても、現行の部活動について合理化や適正化に向けて取組を進めていくことは意義があることで、賛成である。

【大橋清司委員】

「岩手県における部活動の在り方に関する方針」の策定について。岩手県独自か、ほかの県でも取組を始めているのか。また、週 2 回休むということについて、子どもたちの意見は聞いているのか。

【荒木田総括課長】

部活動については、しっかりと休みや時間を決めて活動することが大事だ。県の方針については、3月に出た国のガイドラインに基づき、各都道府県で作成し取り組むこととなっている。県の方針に従って各市町村、各学校がそれぞれ方針を作成し、活動することで適正化を図っていく。週2回の休みについては、子どもたちから意見を集約したということはないが、校長会などで話をして合意を得ている。

【菅野祐太委員】

C Sに関して。57 ページの資料にある学校運営協議会を、どのような会議にしていくかがとても重要である。大槌町でも、人口減少していく社会の中で、何をあきらめて何を残していくのかという議論をしていかなければならないと感じている。それを学校の中で、学校運営協議会を通してどう議論を起こしていくかということについて、県から助言や支援をお願いしたい。質問だが、C Sは小中学校で進んでいると思うが、県立学校のC S化についてはどのように考えているのか。

【佐藤総括課長】

熟議というプロセスは大事だが、C Sへの取組がまだ少ない中、そこまでに至っていないというのが現状ではないか。学校運営協議会のあり方については、ステップを踏みながら高めていかなければならない。そのための情報提供は、県として準備していかなければならないと考えている。最初から熟議という前に、まずは組織を整えることを最優先に取り組んでいきたい。C S導入について、まずは小中学校を先行して進めていく。より地域との密着度の高い、関わりが深い小中学校を優先すべきだろうということで、その状況を見ながら県立高校をと考えている。

【大橋清司委員】

大槌高校のようなところは、遠慮なく進めてよいか。

【佐藤総括課長】

やる気のあるところはどんどん工夫して、目指す連携・協働の取組を進めてよいが、県立高校が正式に組織を整えて取り組むためには、県の規則の整備・改正が必要となる。

【大橋清司委員】

規則の改正はいつ頃になるか。

【佐藤総括課長】

現時点では確定的なことは言えない。小中の推進状況を見ながら、2020年度の前にはと考えている。

【大橋清司委員】

早めに進めていただければ、取り組むことのできる市町村もあるのではないかと。

②「推進センター、県立図書館、県立博物館、県立美術館、県立青少年の家より説明（内容省略）」

—質疑—

なし

(2) 今後求められる施策の方向性について

(資料 10-1～10-4 をもとに事務局より説明した後、各委員との意見交換を行った。)

—質疑—

【大橋清司委員】

校長会が各地で行われ、この「学校を核とした地域創生」に関わる話をされていると思うが、校長先生方の反応はいかがなものか。

【佐藤総括課長】

県内 6 教育事務所ごとに開催されている小中校長研修講座において、連携・協働やCSについて説明してきている。校長先生方お一人お一人にアンケート調査を実施しており、現在、アンケートを集約しているところ。結果については、もう少し時間をいただきたい。印象として、学校の負担がどうなるかが見えないことから、慎重になっている部分も感じられる。地域と一緒にということには賛同する声が多いが、一方でモデルの提示や人員の配置を求める声などもあり、様々な意見を直接伺っている。

【大橋清司委員】

アンケートを集約した結果について、次回で結構なので教えてほしい。

【高橋聡委員】

個人差や地域差がとても大きいと考えているので、岩手県の強み、弱みという枠組みで一括して考えるのは適切でないと思う。むしろ政策的なリスクに着目したい。ここでリスクというのは「弱み」ではなく「自ら作り出した不確実性」というくらいの意味合いである。近年、新しい学習指導要領に代表されるように、教育政策の内容は充実し、色々な要素が盛り込まれている。視野が広がっているので、全てを達成するにはハードルが高い。その結果、放課後の学習支援やCSなど、支援する側に求められる量や質が今でも上がっているし、これからさらに上がっていくと考えられる。さらに、家庭の支援が得られる人とそうでない人との格差が大きくなっている。今、政策的に非常に深い所を狙って教育改革が進んでいるので、支援する側に対する支援も含めて工夫を考えていかなければならないのではないかと。

【大橋清司委員】

例えば、ということはないか。

【高橋聡委員】

例えば、学習支援をするとなったときに、支援する学習の内容がずいぶんと広範になっている。支援する側が経験していない学習が想定されている。今まで自分たちがやってきたことだけでは、追いつかない状況になっているということ。一方で、運動にしても学習にしても、子どもたちに自由な時間を与えた上で、それを消費に費やしてしまうのではなく、自分で組み立てる能力を育てる必要性も高まっている。

【高橋香澄委員】

49 ページのところ。江釣子地区は人口が増えている。その中でも担い手不足に悩んでいる。今、地域の活動には 60 代、65 歳を過ぎないと参加できない状況がある。子どもたちに地域の良さを伝えるなど取組をしているが、こうした活動をこれからどうつなげていくかが課題である。

【細川恵子委員】

私は福祉の仕事をしているので、あまり弱みは考えない。強みを生かすことこそが、弱みや課題を解決するエネルギーを生み出すと思っている。岩手には独自の文化や歴史があるということも強みになる。豊かな人材をたくさん輩出しているところも誇るべき。岩手の大自然、その厳しさも含めて強みなのではないか。格差や弱みをもっている人など色々いると思うが、自分らしさというか、人と比べない幸せの価値観というところを岩手らしさとしていけたらいい。岩手にいて幸せと思えるような活動ができたらと考えている。

【瀬川愛子委員】

人間関係が希薄になっているとどこでも言われているが、そればかりではない。捉え方によって様々だ。県内にいる自分の団体の会員をみても、皆その地域に根差した活躍をしている仲間が多い。自分たちで地域にできること、役に立つこと、輪を広げていくこと、年齢差を超えて抱きかかえていくこと、そういうことが大事ではないか。地元の八幡平市で、コミュニティが中心になって色々な活動を行っている。例えば、運動会では年齢層も非常に幅広いが、うまく役割を持ってもらう。それが、その人たちの生きがいにつながる。地域に役立っているという想いが、生きる力になっているということを感じている。全国と比べても、岩手はそういう面ではつながりが深いといつも考えている。地域差は色々あり、様々な人が住んでいれば考えもそれぞれ違うということもわかるが、決して人間関係が希薄になっているという捉えではなく、年代を超えたところでつながりをもちながら、それぞれの地域で岩手の良さを生かした取組が進んでいけば良いのではないか。

【恒川かおり委員】

岩手の中の地域格差というのを非常に痛感している。実際に、駅の周りなど荒れ果てているところもあり、そのような空間で毎日学校に通っている子どもたちはどんな気持ちだろうと思う。この 10 年間で公立学校の統廃合が進み、子どもたちが幼・小・中・高とほぼ同じメンバーで過ごしてきているところもある。そうすると、子どもの中での格付けが決まっていたり、地域の考え方が子どもたちの中での考え方になっていたりする状況がある。CS 自体は良い取組だと思うが、地域のしがらみだったり狭い空間の中での生きづらさだったりというものを感じることもある。同じ県内でも地域の状況が違うということ認識した中で、社会教育を推進してほしい。子どもたちにとって、小さい頃に触れるべき大

切なものはたくさんあるが、小・中・高の時代に格差があるということに心を痛める。どこに住んでいても岩手の子どもたちで大事にされる、そんな社会教育であってほしい。

【大橋委員】

小さい頃の感動というのは、郷土芸能など良い例だ。この間は釜石の虎舞を見た。近頃テレビでやっていたのは、さんさに向けた高校生の素晴らしい取組。小さいころに培われた部分が、高校生の今になって生きていると感じさせる。

【畠山雅之委員】

盛岡市の校長会を代表して。先日、校長会の東北研究大会で、とある地域から「学校が地域をつくる」という発表があった。それを聞いて、ちょっとした違和感を覚えた。そもそも学校は子どもたちに勉強や運動を教えるところというのが根っこにある。今、学校ではなかなか自分たちだけではできないことが増えてきている。地域の力を借りて、たくさんの大人の目で子どもたちを育てることが必要ではないかと考えている。ごく一部の学校の先生は、地域の人が入ってくることを是としないところもある。そのような意識を改革していきながら、なんとかやっていきたい。私の学校は、従来の農村地帯に新しい住宅団地ができて環境としては難しい地域だが、従来の方々が新しい人たちを取り込みながらうまく進めている。学校からも地域へ発信し、たくさんの大人の目で子どもたちを育てていこうと思っている。小中学生の子どもたちは勉強なりスポーツなり、たくさんのことをやって色々な部分でよく頑張っている。課題に感じていることは、子ども達の自己肯定感が低いということ。それを何とか高めていくためにも、地域の力を借りて、色々な関わりをつくっていくことをやっていきたい。理想としては、地域の方々に学校へ足を踏み入れてもらい、学校活動にも力を貸していただく。また、子どもたちからも地域への発信を進めていく。そのようなことがスムーズにいくと、CSも進んでいくのではないかな。

【菅野祐太委員】

県立学校の魅力化について。これ以上、学校がたくさんの事を抱えていくことは難しい。いかに地域に頼るかということ。全国から、岩手県のあの高校に行きたいと思われるようにしていかなければならない。これからは、本当に大きな改革が高校に求められている。それをやっていかなければ、おそらく地域で高校を残していくことは難しくなってくるだろう。大槌の高校では、復興研究会やマイプロジェクトという取組を進めているが、これが生徒の自主性を高めている。本当の課題に向き合うと、子どもたちは自ら学ぼうとする。今後、頑張って取組を進める市町村は増えていくと思うが、そこで県立学校という壁が出てくる。公平性に欠けるかもしれないが、ぜひ県からも応援をお願いしたい。

【大橋委員】

北海道のある町では、全寮制で、町立の芸術高校をつくっている。おもしろい試みではないか。コーディネーターの立場から何かないか。

【伊藤由紀子委員】

地域の方からの声を直接聞くことは多い。地域の方は、かわいい子どもたちを何らかの形で見守っていきたいと思っている。ただ、このご時世なので、うかつに声はかけられない。声を掛けるのが怖いとい

うのが本音。その中で、学校支援事業のボランティアとして子どもたちに携わっていくことができるのは、本当にうれしいと皆さん言っている。気兼ねなく子どもたちと関わることができるよう、学校と地域、行政の関わりをスムーズにすることが必要。全市町村でできれば良いと考えるが、学校側の理解を得るまでには時間がかかる。子ども達も異世代の方々との交流で得るものはとても多いので、大事にしたい取組だ。

【馬場智子委員】

特別活動の講義で。岩手県出身の学生たちは、ほとんど全員が学校で伝統芸能や祭りに取り組んだと答える。それがすごいことだと思っていない。他県の子は、市町村レベルで舞などが残っているのかと驚く。多様な伝統芸能が継承されている、若い世代が知っていることは強みなのではないか。海外では、県や市で踊りであったり歌だったりを継承している。自分の文化はこういうものだとか、自分のバックグラウンドが言えるということ、文化や芸能が強みになることを知るということも大事だ。生涯教育の施策の中でも、そのようなことをリンクさせながら、活動ができたらいいのではないか。

【大橋委員】

NHKのテレビ。新しい切り口、新しい捉え方、新しい見方をするといったイノベーションから入るという内容。企業が机の置き方を変えただけで、2割売り上げがアップした。星型に机を置くだけで、色々な話し合いが自由にできるようになったとのこと。コーヒーやお茶を淹れる場所を真ん中にした。社員がお茶を飲みながら、自由に話をするようになってきたとのこと。そういう発想の転換というのは、おもしろいと思う。

※次回の会議予定

1月29日(火)